

論文

学内LANを利用した参加型授業の試み

櫻井 武

本稿では、筆者が日頃本学部において実践している学生参加型の授業について述べている。まず、そこへ思い至った前任校での経験を踏まえ、次いで、本学部における学内LANの利用をベースとした筆者が担当する文系授業科目における試行錯誤を紹介する。大学の自己点検強化への動きの中で電子メールやWebページなどを利用した「情報化」授業は、学生の参加を促すだけでなく、それ自体の特性において情報公開や外部評価への対応を容易にすることになるだろう。

キーワード：学内LAN，参加型授業，文系科目

1 はじめに

1999年版の『情報化白書』によれば、高等教育機関における情報化の最近の傾向は次の点に見られるという

(注1)．すなわち、

インターネットや衛星通信を活用した遠隔教育を目指す

大学のネットワークを開放して学生にインターネットをダイヤルアップで利用させる在宅学習システムの導入

教員がシラバス等を公開したり自分の講義内容や教材データベース、自己の研究業績などをWeb上に公開する

社会人大学院や夜間大学院において研究テーマや教材をネットワークで公開し受講しやすくする

公開講座のように市民や地域に講義内容を場合によって無料でオープンにする

以上の5点である。

1997年4月に開学した本環境情報学部でも、様々な分野でこの「情報化」と取り組んでいる。学部設置の書類では当然のことながら「今後さらに進行する情報化社会で活躍できる幅広い視野と的確な価値判断能力をもった人材を育てなければならない」と強調している。本学の情報分野のハード設計に尽力された横井利彰助教授は環境情報学部における情報マトリックスを作成しているが、それに見られるように、多くの授業科目の様々なレベル（問題発見からプレゼンまで）においてその目的を達成するため、積極的な「情報化」が実践されていると言える。上記5点の中でも、はごくごく日常化している。体制が異なるので上記例すべてが当てはまるわけではない代わりに、本ジャーナルにおいて本学部のユニークな活動が各種紹介されているところである。

本稿は、筆者の授業実践における「情報化」にかかわる試行錯誤の一報告である。筆者の研究・教育における関心は国際社会が発する様々な「情報」への感受性（問

題の気づき）の涵養と発信（対応・解決）である。そのための教授法のベースには、いわゆる「グローバル・エジュケーション」(注2)と呼ばれる学生参加型の形式を置いているが、それに「情報化」を導入したらどのようなことができるのだろうか。本学に着任して2年、その先端的な情報ネットワークの端につかまりながら始まったばかりの授業実践のあらましを述べてみたい。

2 「トーク&チョーク」から「トーク&プロップ」へ

近年多くの教員が、とりわけ大教室で授業を実施した場合の学生の受講態度について、憤懣やるかたない気持ちをお持ちかと思う。筆者とて同様であるが、その一方でそうした状況を打破すべく教員側でもそれぞれ工夫をすべきであろうし、当然そうされていると思う。筆者の場合、その乏しい教員歴から達した最初の結論は、テレビ時代の学生には視聴覚器材の使用は必須であり、それをベースに常にS-Rの関係を維持することが大事であるということであった。

例えば、前任校の大型階段教室における200人規模の授業のことを考えて見よう。そこでの受講学生の態度は三層に分かれる。前列に座る学生のグループはそれなりに講義に興味を示す。中ほどの集団は、教師に興味深い授業を実施すれば付いて来るパロメーター・グループである。後列は出席点稼ぎの学生たちで、勉強意欲は低い。机上にはハンドバッグと携帯電話しか置いていない。つまらない授業へのサインは化粧である。何人かがバッグを開けて化粧道具を取り出し、鏡を眺め始めたら教師はツマナイ授業への注意信号と受け止める必要がある。

こうした状況では従来の「トーク&チョーク」のみの講義では、少なくとも筆者の短い教歴では対応しきれなかった。つまり、教師が一方的にしゃべりキーワードを板書することが主体では、やがて化粧があちこちで始まってしまったのであった。ただ筆者にとって多少なりとも幸運だったのは担当したのが「現代メディア論」というように、テレビや電話についての話など学生にとって身近であったことと、映像や音声を多用することが不自然

ではない科目であったことであろう。

やがて、筆者が想いついた教授法は、「クォーター制」の導入である。クォーター制とは筆者の出身業界である放送における番組編成の伝統的な手法のことで、一番組の長さを「クォーター」、つまり 15 分を基準とするものである。今日では、多くの番組が 10 分程度の正味に対して前後 2~3 分の CM タイムというようなパタンで放送されているが、その応用である。つまり、一つの講義トピックに対する学生の集中可能時間は 15 分程度とみて、90 分授業の流れを 6 つのトピックで構成して行くのである。トピックが変わるごとに学生に手を上げさせたり、意見を求めたり、映像を使ったりして Stimulation (業界用語ではツカミ) を変えるのである。学生の Response は、教師によるこうした多様な問いかけや仕掛け (つまりツカミ) がいかに有効にかかっている。筆者のように笑いとれない教師はここがづらい。

一方、必修科目の語学講読も担当したが (注 3)、そこでの授業法は「タスク・グループ化」である。上述した「グローバル・エジュケーション」にはこの方式が最適である。まず、40 人近い学生をテーマ別にグループ分けし、さらに、各グループの学生一人一人にテーマ関連の個別の英文資料を渡し、課題を実施させるのである (タスク)。内容の把握が終わるとそのグループ内において、それぞれ自分が担当した内容についてのプレゼンテーションを行い、知識を共有する。次にそのグループとしてのまとめを作り、平行して行われている他グループの作業の終了に合わせて、各グループの代表はクラスに対して発表をする。その発表を聞いた各学生は、最終的に全部をまとめたりレポートを学期末に提出するのである。つまり参加しなければ単位獲得は覚束ない。

これを進める上で筆者は 2 つの支援体制をとった。一つは授業中学生の間を巡回して個別指導をしたこと。能力別でない語学のクラスでは当然のことながら能力の分散に対応する必要がある。そして共通の問題点を発見した場合には板書して全員に注意を喚起した。もう一つは大学図書館内の教室の使用である。机や椅子が可動式になっている教室で、座席の配置を自由にさせた上、時間内は教室の出入りを自由にし、参考図書を容易に参照できるようにした。国際問題などがテーマの場合、背景知識の支援が何よりも大事であり、その点、図書館内教室の使用は非常に便利であった。

授業後のアンケートでは、「語学というより社会科の授業であった」と多くの学生に言われたが、他方「グループ形式の授業はめったにないのでおもしろかった」「ビデオを見たり、班で協力してディスカッションをし、一つのことについて理解していく授業がとても楽しかった」との感想もあった。もっとも本道は語学力のアップであるが、その点で学生たちの多くは「どちらともいえない」と回答して、この教授法にとまどいを示した。こ

れについては筆者として策に溺れたかと内心忸怩たるものがあったことを付言しておきたい。

しかし、こうした経験の中から、一部だが学生たちの積極評価をテコに、教師による「トーク&チョーク」の授業から学生参加型授業を模索し、促進するようようにできないかと考え始めたのである。そして、一応の結論は、学生主体による、いわば「トーク&プロップ」への転換である。「プロップ」とは芝居の小道具のことであるが、ここでは学生が工夫して作った「プレゼンテーション・ツール (模造紙上での図解・OHP・写真など)」を指している。工学系や演習科目などは別にして、担当する教科にもよると思うが、文系科目においては、何がしかでも学生による能動的な参加の余地を残すことが必要ではないだろうか、というのがここまでの見解であり、本学部においてもそれを実践しているところである。なお、この段階では、前任校では、学内のネットワークは構築されておらず、コンピュータは図書館内での検索のみに使用されていた。当然今日であれば、別の展開になったと思われる。

3 学内 LAN を利用して

前節では、学生参加型授業への展開を説明し、しかもそれがコンピュータ・ネットワークとは縁遠いところで実践されたことを述べた。いよいよ本節では、学内 LAN と出会うことによってそれをどう授業の中に活かして行こうとしているかの報告である。もっとも端から弁解がましいが、本学に着任して満 2 年ではそれ程語れるものは多くない。筆者にとって、いずれの担当科目も「本邦初演」ばかりであり、本原稿執筆の段階で 2 回目があったのは 1 科目のみで、実際手探りのようなことの繰り返しであったことを申し上げておかねばならないだろう。

こうした状況であえて本報告をしようとするのは、まさに本学部の先端的な情報ネットワークを一般の授業にも使わない手はないという本心の発露であり、このジャーナルを手にするであろう (全国の) 同僚諸氏、とりわけ興味を持っているが踏み出していない方々にヒントとなればとの思いからである。従って本節で紹介する筆者の二つの実践は、特にユニークというものではなくごくごく初歩的なものだと想う。まずは、「現代国際情勢」における Web ページおよび電子メールを利用したレポートのテーマ決定についての報告である。二番目は「国際情報システム」での Web ページを利用したごく短い演習レポートの作成についての記録である。

筆者が本学部で最初に担当したのが 2 年生後期の「現代国際情勢」であるが、この科目は「国際間の情報と文化そして人の移動がもたらすインパクトについてマクロな視点から考える。具体的には、国境を超える衛星放送や音声放送、内外の有力な活字メディアの英語による論

調を通して国際社会の抱える社会や文化あるいは政治等についての問題点を学び、その未来像、解決法を考察する」というものである。これは他大学の新聞学科などに配置されている「時事問題研究」に「国際社会学」を加えた科目と言えよう。

この授業の実施にあたり、コマを2部に分け(注4)、前半を時事問題にあて、後半を国際社会学の主要テーマの一つである難民や労働移民などの「人の国際移動」の英語による論文やメディアの論調などの考察に割いた。これらの論文は概説に始まって各論に至るように慎重に選択・構成して印刷教材として用意し(98年度)、毎回のテーマは授業計画として学生に予め提示している。そして前半を学生によるプレゼンテーションの絶好の機会ととらえ、担当の学生には各週の国際ニュースからトピックを一つ選ばせ(例えばこれが上述の国際社会が発する様々な「情報」への感受性(問題の気づき)の促進)、その内容・論点・解決への提案などを盛り込んだA4判のペーパーを作成させ(プロップとなる)、印刷の上、他の履修者へ配布する決まりとした(発信(対応・解決)に当たる)。

担当学生は、まず、それを基に出席者の前に立ちプレゼンテーションをする。その間筆者は扱われた問題のポイントを板書しておき、発表が終わり次第背景説明をする。その際テーマが動いているようなものであれば、教卓の情報コンセントにつないであるラップトップで新聞社や放送局のWebページを開いて教室内スクリーンに映し出すなどして最新情報を提示し補足を試みる。担当学生たちも関連のサイトにアクセスして目だったものを資料として添付することはごく当たり前のことになっている。同様にラップトップを持ちこんでいる学生も取り上げられているテーマについて関連ページを検索する。その他の学生は感想を述べたり、質問をしたりするわけだが、テーマによっては、非常に活発なディスカッションへと発展する。このようにして、ペーパーを作成してから発表までの間の動きや未知のテーマについては学内LANを通じてリアル・タイムでフォローされるのである。また、この授業では国連機関や海外の報道機関、NGOなどの英語のWebページが一種の authentic material(実物教材)として多用されるのも特色である。

次に、98年度の電子メール利用例に触れる。着任早々ということもあり本学部のLAN・システムに対する知識の無さもあって左程の活用はできなかったが、それでもインターネットの利用に加え「現代国際情勢」の履修者のほぼ全員(何人かは口頭)と学期末レポートのテーマについて、電子メールを介して対話し決定するプロセスをとった。課題レポートのテーマは「各自がヒトの移動の実例を調査・報告」というものであった。もちろんテーマ選定にあたっては、相談日をもうけ研究室を開放した。しかし学生が圧倒的に利用したのは電子メー

ルであった。

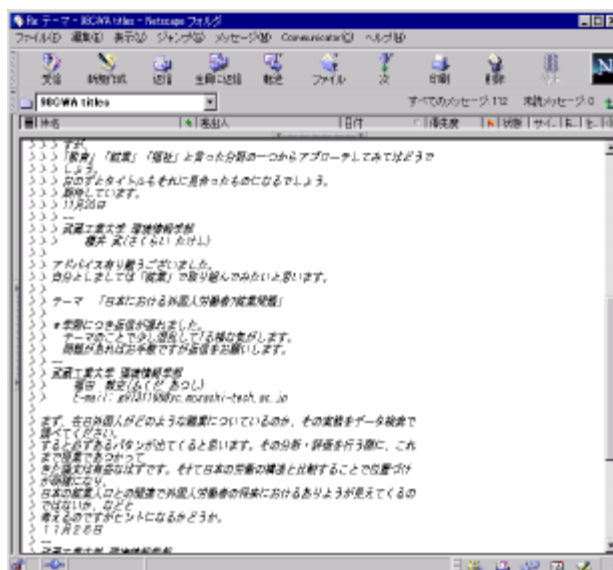


図1 電子メールによる学生とのレポート・テーマ決定

報告されてくるテーマを見ると、その殆どが卒論や修士論文にでもしたいような大テーマばかりであった。また、その説明もあやふやなものが多く見られた。口頭で説明する場合ならすぐさま双方で確認がとれるが、電子メールでは一旦文字化するとなれば不明確なものでは通らない。そうした学生にはテーマを絞るよう求めたり、さらにリサーチを進めるよう促した。中には実際そのテーマで調査をしてみたもののような成果が得られず、途中メールで変更を申し出る学生が出るなどしたが、面と向かってではない分、学生は率直にそうしたことが出来たのではないかと思っている。(図1)また、教員も常に研究室に居るとは限らず、いつでも、どこからでもアクセス可能なこの電子メール・ツールは、教員と学生との対話を深め、議論を深化させるのに役だったのではないかと考えている。

二番目は3年次の「国際情報システム」でのWebページを利用したごく短い演習レポートの作成についての記録である。99年度後期に「国際情報システム」という科目を本学部で初めて担当した。この科目名がハード面からソフト面までを指す融通無碍な印象を学生に与えたため、筆者の授業がソフト面の話だと分かると、インフラなどの講義を期待した学生は早々に去っていった。今期はメディアというものが誕生の時からグローバル性を背負っていたことを活写したアメリカのメディア史家による著作の翻訳をテキストとし、それをじっくり読みこむこととした。

この授業では、各種のメディア、とりわけ今日マス・メディアと呼ばれる装置が歴史の中で政治指導者によってどのように利用され、さらには技術の発展とあいまって国内的、国際的にいかに伝播し人々を説得していった

のかを学んだのだが、履修者に安くも無いテキストを購入してもらったこともあり、それを十分読んでもらうことが大事と考えた。そのための方策として履修者全員に、一応読破したことのあかしとして「演習メモ」を提出させることとした。ゼミなどではよく使われる方法である。本授業では、学習するそれぞれの章について、毎回「感想・疑問点・意見・議題」の観点からコメントさせた。テキストをしっかりと読み、より深く考えた学生程充実したメモが提出できる仕組みといえる。こうすることで、一人一人の課業が教師から見えることとなった。

当初のやり方は、提出されたペーパーをクラスの顔見世興行よろしくいくつかまとめて、数週間にわたってプレゼンテーションをしてもらった。この間に情報担当の横井利彰先生より Web を利用した課題提出用システムのサンプルを LAN 経由で提供していただき、本授業のページを起こした。履修者側も個別にリンク・ファイルを作成し、毎回アップロードした。授業は毎週金曜日の 1 限に行われたが、この演習メモは水曜日一杯にアップロードすることとし、木曜日にはすべての履修者がメディア・センター内または自宅のパソコンにて仲間の演習メモに目を通し、自分のメモとも付き合わせて、ディスカッションのトピックを持って授業に参加できるようにした。(図 2)

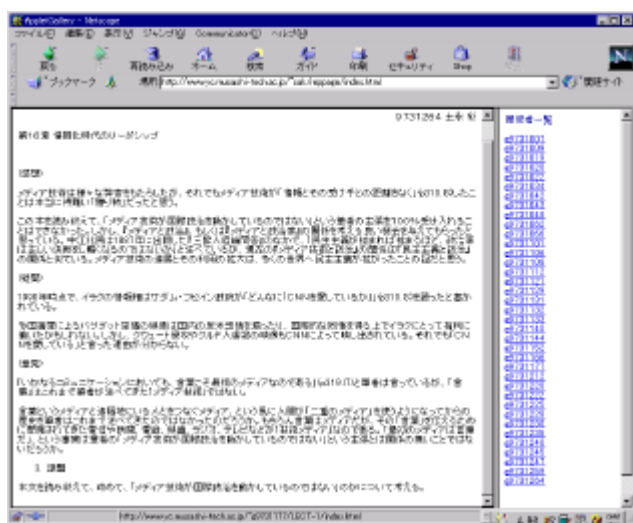


図 2 学生による演習メモ（右ボックスは履修者へのリンク）

この方式は、一般の授業でも学内 LAN を利用しうることを示したり、印刷用紙の使い過ぎをチェックできる、自分のやっていることが常に仲間からも見えること、演習メモに基づいた予習が可能なことなど、それなりに前向きな側面を持っていると思う。しかし、他方で問題も少なくなかった。アップロードすると授業に参加した気になるのだろうか、また面倒がってアップロードしない学生もいて、「演習メモ」の提出数と出席者数はいつもア

ンバランスであった。良い内容の「メモ」を出しているのでは非それを敷衍し説明してもらおうと楽しみにして金曜日の 1 限を迎えても欠席している、あるいは大幅に遅刻して間に合わないケースも多々あった。

担当教師である筆者の側も「演習メモ」の成果を逆にどのように学生に提示するかで試行錯誤に終始した。例えば教室で、代表的なメモ何点かをプロジェクターを使ってスクリーンに写し出してみたが、文字が小さく遠くに座った学生には判読できなかった。同じトピックについての複数の学生の意見を紹介するのに、Web ページには従来のハンドアウトのような一覧性（総覧性）がなく人数分開かなければならず手間がかかった。何人かの学生は教室にラップトップを持ち込み、情報コンセントにつないで、教師と同じページを共有することができた反面、残りの持っていない学生はそんな時手持ち無沙汰となった。こうしたことから、学期の最後の方では、筆者が前日にアップロードされたものの中から授業内で取上げるのに相応しい何例かをハードコピーに取り、糊とハサミでトピック別に構成して学生に提示することとなった（筆者のコンピュータ・リテラシーからしてこれが最速の方法）。学生全員がラップトップを持参することが不可能ならば、今後は情報処理演習室や LL 教室で実施することも一案であろう。

どうやら成果の発表というよりは反省の弁になってしまった。しかし、学生にとって自分の課業を Web 上で公開することは、まず、参加感がある、次いで自分の考えが広く他人の目に触れ、検証されることに他ならず、教育的にも好ましいことと言えるだろう。加えて授業における論点や話題を提供すること、その授業科目ではどのようなことをしているのかが外部からも見えるということは、情報公開の必要性、あるいは外部評価、自己点検の観点から継続的に考慮して行かねばならないことでもあろう。毎回の作業は履修者にとって緊張感を伴ったものになったはずであるが、それは教師にとっても同じことで、単にシラバスを公開するだけでなく、授業を同時進行的にチェック可能な状態に置くことは、やはり緊張するものである。当然本授業では期末の課題については、自分の提起した論点ばかりでなく他の学生によるそれを議論するものでもよいこととした。事実多くの学生がそのようにしたことは、学生同士が学内 LAN を通じて学習上の多くのコミュニケーションを行ったことに他ならない結果であったことをご報告しておきたい。

4 おわりに

本稿では、筆者が日頃実践している学生参加型の授業へ思い至った経験と本学部における電子メールや Web ページなどを利用した一般授業科目の試行錯誤を紹介した。こうした授業を今後も継続して行く場合、学年・ク

ラスのサイズ等考慮しなければならないポイントは多々ある。とりわけ、当該の授業科目とそうしたツールの利用との相性もあろう。教師の学問的な立場もあろう。また、授業のどこを情報化するのかというレベル（収集・加工・処理・蓄積・発信等）の問題もあり一様でないだろう。それでも、社会の情報化から得られる果実は余りにも大きく、（本学部の先生方には釈迦に説法であるが）本学部の先端的な情報ネットワークを様々な角度からそれぞれに利用を進めて行くことは重要であろう。

その点で、筆者の乏しい経験から以下の点に留意する必要があるように思う。

- 1) 学生によるパソコン（ラップトップ）の個人所有増と教室内で日常的に使用が図られること。そのため廉価なパソコンの斡旋やレンタルが望まれる。
- 2) 一般教室における情報コンセントとパソコン対応プロジェクターの増設。
- 3) 教員のコンピュータ・リテラシーの向上とそのため研修の強化。

さらに、筆者個人の試みについて言えば、次の項目を注意して行きたい。

- 4) 今回は、特に学生の評価を受けているわけではなく教師の側で一方向的に試み論じているので、継続のためには学生アンケートをして検証する必要がある。
- 5) 授業科目のねらいや体系性との兼ね合いを図り、手段が目的化していないかどうか絶えず点検すること。

いずれにしても、いわゆる情報処理科目ではない授業科目においても、電子メールやWebページを利用した授業の実施は全国の大学で日常的なものになっているはずである。特に『情報化白書』99年版にもあったように、ご自分のWebページに綿密なシラバスと授業内容を掲載しておられる先生方は多いと思う。しかし、さらに参加感があり、個別指導を木目細かく行えるツールとしてのコンピュータやネットワークは、大学の大量化、少子化、全入等々これからの大学が抱えざるを得ない問題を考えた時無視しえない存在である。それゆえインターネット機能を備えた携帯電話を含めたコンピュータ・ネットワークの一般授業科目における利用法開発は、フェイス・ツー・フェイスの接触に加え、今後ますます必要になってくるのではないかと思われる。

（注1）日本情報処理開発協会編：情報化白書 99年版，p.214，コンピュータエージ社

（注2）グローバル・エジュケーションとは「地球的視野を育てる教育」のことだが、松田（1993）は、従来の平和教育・国際理解教育に加え環境問題・南北問題・人種問題など地球規模の問題を取り扱う教育のことで中学や高校の英語や社会科の授業の中で実践されてきた総合的な学習である。しかし、地球規模の問題を取上げれば自

動的にグローバル・エジュケーションになるものでもない。そこで必要なことは、自己発見型の学習方法、批判精神を養う教育のことであり、民族紛争や経済摩擦のニュースが毎日のように紙面を賑わしている中で、他国の文化や利害をも尊重し、民族・国境を越えた視野を持つことは大切であり、国際語としての英語を教える目的を持つ大学の教養課程においてこうしたテーマを取り入れるのは自然なことだと述べている。このグローバル・エジュケーションの生成は「グローバリゼーション」と関わりを持つ。米国の例で言えばここ20年程の間に、特に初・中等教育の中で一種の運動と化している。米国は第二次大戦の勝利と戦後の繁栄の中で国際問題についても関心があったが、ベトナム戦争の敗北などによる影響で60年代以降内向き傾向が強まった。しかし、その後の経済摩擦や東西関係の変化、南北問題の危機の中で再び国際化への関心が高まり「多元主義」「相互依存」「変化への対応」のキーワードのもとに国際化教育が行われるようになった。今後日本でも重要性の増す教育分野であろう。なお詳細に関心の向きは次の3点を参照されたい。

- 1) 松田まゆみ他著（1993）『発信型英語教育の実践 桜美林大学経済学部の挑戦』三修社
- 2) 櫻井武（1996）「東横短大におけるグローバル・コミュニケーションの試み」『東横英文学』東横学園女子短期大学
- 3) Kneip, W. (1987) Next steps in global education: A handbook for curriculum development, American Forum, New York

（注3）通常1クラスは55人前後であるが、他の外国語を履修する学生が抜けるので40名前後となる

（注4）このように分けるのは先述の「クォーター制」の変形である

